

優秀賞 福岡県 野中 優希 様 （大学生）

この春、私は学生野球を引退した。小学生、中学生時代は全国大会に出場し、高校時代はコロナ感染症拡大のため甲子園が中止となり、地方大会のみとなった。当たり前のことがそうではないと気付かされた夏であったが、素晴らしい仲間に恵まれ、とても充実した時間となった。

その後、現在の大学へと進学し、硬式野球部に入部した。初めて親元を離れひとり暮らしとなり、食事や洗濯などの大変さが分かり、いつも当たり前にももらっていたことのありがたさを痛感した。野球を通して多くのことを学んだ時間は、私にとってかけがえのないものとなった。

私は、4月29日生まれであり、大学2年生の春には20歳となった。年金事務所から通知が届いたタイミングで両親から年金についての意見を聞かれた。

国民年金は20歳から納付義務があること、ただし学生の間は特例で納付免除の制度があることなどを説明された。私は即座に、免除制度があるならば納付免除すればいいと答えた。使える制度は使った方がいいと考えたからだ。すると両親は、免除すると10年間は追納することができるが加算金がつくこと、追納しないと年金を受給するときに受給額が減額されることなどを説明してくれた。

私は今まで年金制度についてあまり真剣に考えたことはなかった。「あなたが納付することを選択するなら親が納付して、就職してから返してくれればいい。」と年金制度の説明を受け、決断は自分でするようにと考える時間をもらった。私は、両親からの説明以外にも自分なりに制度を調べ、学生の間は納付してもらうことに決めた。すると、今度は、前納すると割引になることを説明された。

2年前納の納期限はゴールデンウィークの関係で5月2日だったが、高額のためにコンビニエンスストアでの納付ができず、しかも誕生日前日の4月28日にしか納付書の発行ができないというタイムスケジュールであった。非常にタイトなスケジュールでありながら、私が希望すると年金事務所は即座に納付書を送付してくれて、両親もすぐに金融機関で納付してくれた。

なお、付加年金のメリットも聞いたうえで、加入当初から納付をしている。去年は2年前納の口座引き落としの手続きも行った。

今回、20歳になったタイミングで両親が年金制度についてしっかり説明してくれたことに感謝している。年金制度について改めて考えたことで、後輩には納

付の大切さを話している。私が身をもって体験した出来事を伝えたいからだ。なぜならばこの後、思いもよらない出来事があったのだ。

ある日、野球部の後輩が練習中に緊急搬送された。彼は弟のような存在であり、私は目の前の出来事に動揺したが、きっとすぐに元気になると思っていた。

しかし、彼はしばらくの間、意識不明の状態が続き、命さえも危うい状況となった。皆が、また一緒に元気に野球ができることを祈った。

その後、奇跡的に彼は目を覚ましたが、体がほぼ動かなくなってしまった。彼が 20 歳になってすぐの出来事だ。

この事故はとても残念な出来事であったが、受け止めなければならない事実だ。彼の両親は、彼が 20 歳になったときに学生納付特例制度を利用し、手続きを行っていた。このことにより、彼は障害年金の受給対象者となったのである。

彼は、懸命にリハビリを受けながら少しずつではあるが回復しており、今後の生活について前向きに考えている。定期的な年金収入は、彼と彼の両親にとって前向きに生きる希望の光のひとつとなっているはずだ。

今、元気に生活している人が、急に障がい者となるとは誰も想像しない。だが、誰にでも可能性があり、それはもしかしたら今日なのかもしれない。

この障害年金という制度は、国民全体で支える、まさに年金制度そのものではないだろうか。遺族年金や障害年金など、公的な年金だからこそ支え合い、助け合いの制度が成り立つのではないかと考える。

私は今、教育学部に在籍している。私は来年から社会人として、厚生年金保険の被保険者となる。未来の教育者として今後子供たちにこの出来事は実話としてしっかり伝えていきたい。いつ、どのようなことがあっても、社会のルールは弱者に優しく寄り添う。みんなで支え合う制度、それが年金制度であると思う。これは、支え合いの制度であり、なくてはならない日本が誇る人生の備え、未来へのバトンリレーなのだ。